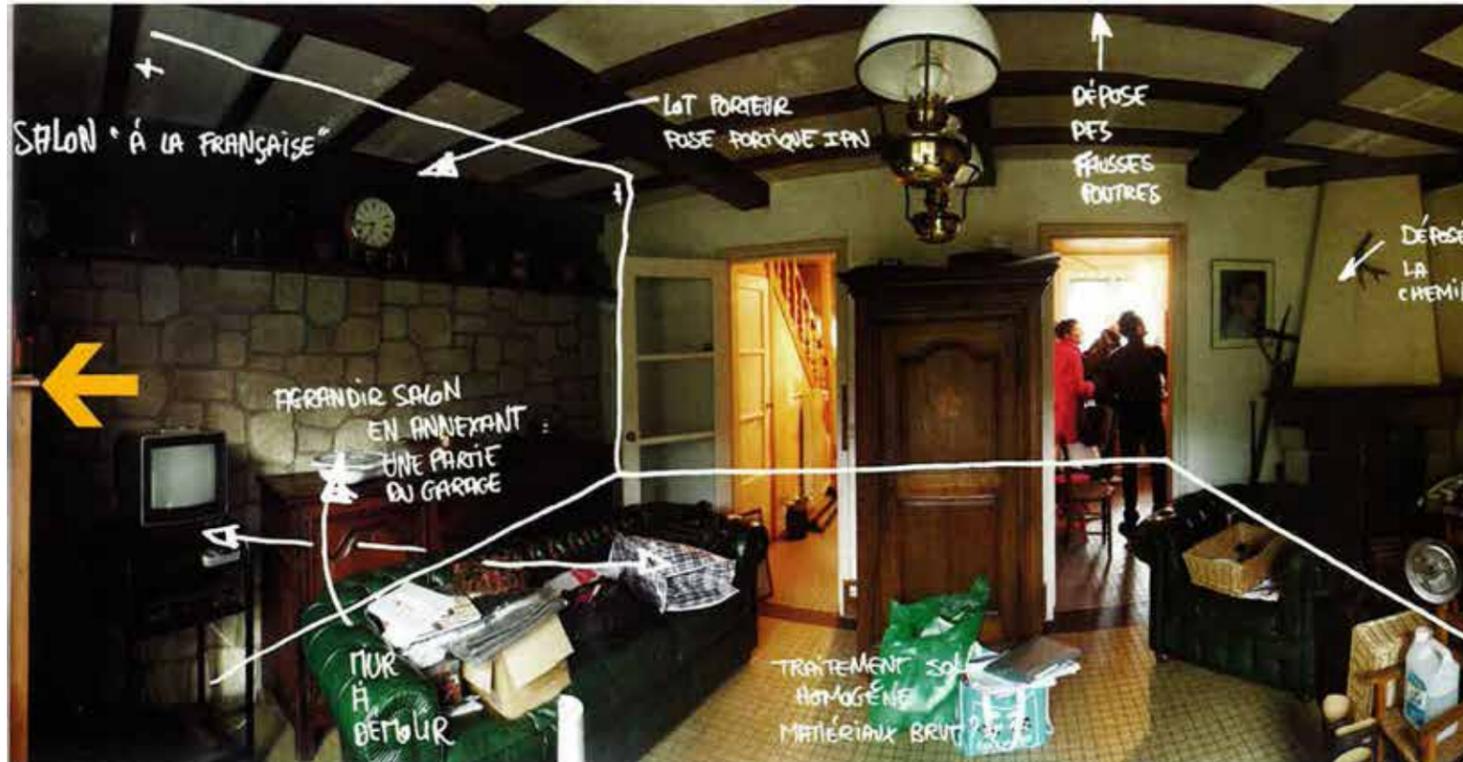


真似したいアイデアの宝庫でした。

MAESTRO OF RENOVATION

パリで見つけた、家具で変える住宅リノベ。  
最注目建築家集団シグーの改築は、





### VAR

200年前の廃材を使った、6階建ての一軒家改築。

パリ市内の一等地、18世紀の一戸建ての改築。地下1階、地上6階建ての家具。2つのキッチン設備もシグーが制作。200年前の木廃材を製材し直し、数畳量かなフローリングに再利用。2012年完成。



## 収納も、仕切りも、ディスプレイも…。家具で空間を変える、という考え方。

進化し続けるシグーのリノベの土台にあるオリジナル家具制作は、使い捨てのモノ作りに異を唱え続ける彼らの、“素材”へのやむなき愛情と、空間の機能美の追求の賜物だった。

photo\_cigué, Ayumi Shino (AMB-05, CUISINE ELI, KIT)  
text\_Chioyo Sagae

パリの建築学校の在学中、偶然受けた注文家具の制作をきっかけに、若き6人の建築家(当時は男)が集まり、人気ショップ(メルシー)にセレクトされた家具やコーナー作りを機に、今や住宅の増改築、人気店舗の設計・制作に世界を飛び回る建築家集団(シグー)も。そもそも大がかりな改築工事なしに住まいを変えたいという依頼に、秀逸なオリジナル家具を提案・制作することからキャリアを開始した彼ら。以来、プロジェクトの規模は変わっても、あらゆる空間への取り組みに、素材感あふれる機能的な家具への入魂は変わらない。完成したばかりの(VAR)は、度重なる増改築を経た18世紀の館



### CRI

3階建ての家を増築・拡張し、採光性と動線の両方を確保。

既製の元農地を買い足した敷地はL字形。曲がり角に建つ既存の家を3階建てを新築し、つなげた拡張改築。新旧木材の美的融合を図るため、樹皮で制作した階段に手仕事の意匠が宿る。2011年完成。



### CUISINE ELI

木廃材を合成樹脂で固め、レトロで美しい調理台に。

約5㎡という狭小・最小のキッチン。狭道の貨物運搬用素材を組み合わせ、樹脂で固め、流しやレンジを内包する調理台を制作。その下の空間に冷凍庫や洗濯機を内包する収納を完成した。2007年完成。



### KIT

家具ひとつでリノベ、の好例。配置次第で可変性のある空間に。

玄関、リビング、キッチンがひとつながりの住空間を仕切れ、大量に収納でき、かつバラせば個別にも使える家具。それが(KIT)、オープンキッチンの仕切り兼収納棚も同空間に配備。2007年完成。



### AMB-05

画期的な収納アイデアを満載し、家具不要のアパルトマンに改築。

40㎡のアパルトマン内のキッチンの狭小空間。寒家の仕切り、暖家の床下などすべてを収納に。ソファとテーブル以外は家具いらず。かつ、開閉可能な自由空間→大リビングを実現。2006年完成。

を、子供のいる若い夫婦が住まう現代的な住居に昇らせる全面改築だった。エントランスの床には質感にこだわった床付けのタイルを敷き詰め、建設当時の家を物語る優雅な中央階段に合わせて、床のフローリングには200年前の木材を製材し直して再利用。ブルグニオン建築家の施主の好みに合わせ、全館の家具も設計制作した。素材とデザインにこだわった改築と家具制作を同時に行う、まさにシグーの力が結集する家となった。

これまでも、木の廃材や廃棄寸前の家具を可能な限り改築や家具制作に再利用してきたシグー。郊外の一軒家(SEEV) (P.36)や、37)や極小キッチン(UCOの住所m)など、家の歴史に敬意を払い、かつ古い素材が持つ「時」の風合いをよまなく愛する彼ら独自の表現をした。それは、大量消費と破壊を繰り返した末に人々が今、共通に感じる現代の美意識でもある。家の改築自体も、同じ時代の意識の表れではあるまいか。

「長く慈しんで使ってもらう家や家具を、美しく、しかも最小限の消費で実現したい」と彼らは願う。その最たる例が、家具いらずの家(AMB-05)であり、表面両面に収納でき、仕切りにもなり、分解・個別使用も可能なマルチ家具(KIT)だ。小さな都市の住空間に必要とされる豊かな発想。その一つ一つの完成度の高さも、作業場を持つ彼ら自身が制作から施工まで受け持つ独自のシステムのおかげといえる。建て直し増築(CRI)も、既存建築と新築の接合部分(木の階段と床)に、作り手としてのシグーの仕事の意匠が表れる。



パリ郊外の古い倉庫を改装したシグーのオフィスには建築事務所としての特殊な現場感が満ちる。1階は資材を積置いたり、家具を制作する作業場。

## えっ？ 資材置き場と作業場付きの建築家オフィス？ 若き6人の建築家集団が、 世界中で引っ張りだこな、その理由。

路上で収集したガラクタを再利用し、美しい家具に生まれ変わらせてしまうその手帳。彼らが手がけた住宅のリノベの隅々に、「手作り」や「再利用」など、彼らの美意識を見ることができました。

パリの郊外にユニークな事務所を構えて4年。平均年齢30歳の若き建築家集団の核心に迫るべくオフィスを訪ねた。扉を開けば、まず目に飛び込んできたのは古く、そして作り込まれた古い資材の山。そして作業場。2階以上がと、コンクリートむき出しのフロアに簡素なメタルの大テーブルが並び、ようやく建築事務所らしい様相が現れる。シグーもさらに若いスタッフも、思い思いの場所で作業する雰囲気はまるでサークルの部室のようだ。——以前から住居のリノベーションを多く手がけていますね。その興味はなんでしょ？

アルフォンス 家の中だけでなく、地区や町の特性や成り立ちなど、建築的要素以外に理解すべきことが山ほどある。そこに新しい住人の個性や暮らしを揺く。僕らはいつもそれらのヒストリーを理解し、次のヒストリーに「つなげる」ことを意識しています。歴史、人、マテリアルという意味でもね。

ユーゴ これまでのリノベーションのほとんどは郊外の庶民的な一戸建てで、前の住人がお金をかけずに手作りで二つした痕跡（DIY）が至るところに残っている。感心したり、驚いたり、でもそれが家の魅力を作っていて、学ぶことも多い。また、できるだけその家の資材を使い、新しい空間作りを再利用しようとする、残る資材と廃棄される資材を見つければ、こうした例を見るにつけ、僕らはこの後に簡単に廃棄される資材を使用しにくいし、作りたくない、と気持ち新たにします。

シグーのリノベは家具付きと

いうイメージが強いですが、家具制作も、やはり同じ意識から？

ユーゴ 最初は僕らもお金もなく（笑）、事務所や作業場の設備を、収集した木箱や金属で再構築してました。ガラクタの中から選り出したものには、素材、形、アイデアに、再使用させるに足る明確な理由があった。置かれる箱とか、ジョイントを使って収納の土台を拡張できるシステムとか。こうした経験が僕らの家具制作に役立っているのは確かです。時を経て残る古い木材で作る家具は美しいし、また新しい木材で作るにしても、この先長く使ってもらえるような家具を作りたいのです。

長く使われるためには、素材の魅力のほか工夫やアイデアが必要。そんな家具をシグーは作る。ユーゴ リノベーションの際にも建物の改装だけでなく、こうした家具とのコンビネーションで空間を作るのが理想です。例えば古いガレージやアトリエを訪れると、その場に必要ならちょっと特殊な道具をしまし、整理棚や机が空間の一部を構成している。僕らはそういう必然が好きなんです。その場所のためにどんな家具が必要かをきちんと問われたものを作りたい。——が、家具だけで空間を変えてほしいという依頼も無い。すでにユーゴ（ユーゴ）とかね。すでに改装を済ませていた小ロフト空間を仕切り、収納も欲しい。しかも低予算だったので、家具だけで解決策を見つけた一例です。その家で具体的に収納したいものを聞いた上で、例えば古い多機能収納家具なので、テレビも家具の中に収



1 シュアの依頼で制作した可動キッチン（CAR）。屋外レストラン用途用仕立て。2 可動キッチン（CAR）をサイドから見たところ。3 定数の学校の椅子の座面をレザーで覆ったリメイクバージョン（S10）。4 古い事務用車やトランクを内蔵する書架（STH）。リサイクルを促したアップサイクルリングの象徴。5 住宅を改装した「イザベル・マラン」東京・豊山店。6 自然派コスメ（イソップ）パリ最新店では日本の五寸釘を使って良品を。

### cigué

志からノカミーユ・ベナル、ユーゴ・アス、アドリアン・アンブアルブアイ、エルワン・ルヴェック、ギエム・ロナルド・アリアス、アルフォンソ・サルトルー、ワイレット建築学校の同級生6人が2008年建築事務所（シグー）創設。住宅の増改築から店舗の内装、注文家具制作など設計から施工をこなす特異な協働体制。http://www.cigué.net



まっぴらで、小さな書き物も引き出せる。再利用という点でも分岐したら33ピース、すべて木箱やサイドテーブル、棚などに再利用できるようなっています。

アルフォンス 僕が担当したし字形の敷地の拡張改装（CR）も同じく低予算でした。増改築はなされたが、逆に、家具を制作する費用は足りなかった。それでも、既存と新築の家をつなぐ要の階段に美しい木材を使い、既存の家の古い床と新しい床を正確で綿密な木工技術で接続した部分に、シグーらしい仕事が見えてきたと思っっています。僕らの仕事に飽きられて、その後、僕は自分でシグー風？の箱収納を作ったんです。（笑）

——マテリアルの細やかなセンス、ピリッとしたシグーの特徴ですね。カミーユ 僕らにとつて初の、広大な一軒家建築のリノベ（VARR）は、シグーの素材のセンスを認められての依頼だった。大規模な改装工事を経た後の内装建築と家中の家具のデザイン制作を任せられた。だから、エントランスに敷いたタイルは、デルフトスタイルのように味のある古び方をしよう。泥灰土にガラス粉を混ぜて質感にこだわった。壁も、手触りを感じさせる微妙なニュアンスを求めて漆喰の配合を選び、残されていた18世紀の階段の雰囲気も全体に運動させよう。試みた。家の素材の表情は家具と同様に、その場所のためにこだわりたい。

ユーゴ これは質素なプロジェクトだったけれど、考え方はいつもと同じです。まずそこにあるものをよく理解すること。そして、その場に必要なものを作る。買の高

いものでなければ、結局資源の無駄使いになってしまう。カミーユ その意味でも、僕らは素晴らしい協働者たちに出会い、助けられてきた。オグー・メードのタイルを焼いてくれる職人や特殊な技術を持つガラス職人、木の扉材を専門に各種収集する地方の扉材屋など。家具制作も（VARR）では、僕らの顔面通り（でも良い仕事をしてくれる木工アトリエに制作をお願いしたんだ）。

——もう、事務所が作業場であな方が作らないのですか？

カミーユ それが僕ら。その職人のアトリエは事務所近所で、打ち合わせも制作過程を見るのも徒歩5分の距離。まるで近くに新しい作業場と仲間ができたようだよ。試作や単品は僕らが作るけれど、大量の家具制作には頼りになる。

——従来の建築家の枠を超えるシグーの近年の発展に即したシステム作りは必要かもしれませんね。

ユーゴ 去年からコスメブランド（イソップ）をはじめ、イザベル・マランの世界展開など、店舗の内装設計が増え、仕事の仕方を見直す時期だった。東京やソウルなど離れた土地で思う通りの空間を作るにはどうするか。答えは、制作基礎のフレキシビリティに加え、僕らの基本、「理解する」姿勢に立ち返ることでした。資材や道具などマテリアルはどう作られ、どう使うのか、もっと理解を深めたい。手触りのある加工されない素材のマテリアルであれば壊れても修理できるし、その後違う用途にも作り替えられる。きちんと理解さえしていれば、リノベや家具制作も同じなのです。